

## メイコさんのメッセージ

「私のホントのふるさととは……」

中村メイコ

「メイコさんのお墓はどこ？」とたずねられると、私はいつも楽しいふんいきの中で、いたずらっぽく答える……

「愛知県のネ、豊橋の近くに富岡って所があるの。その“洞雲寺”<sup>とううんじ</sup>という、とってもステキなお寺の中の、小高い丘<sup>おか</sup>の上よ。」と……

富岡は私の母方の祖母<sup>むすめ</sup>のふるさと。一人娘の私は、生まれたときから、ずっと一つ屋根の下で暮らす祖母が大好きだった。もちろん小説家の父も、いつも明るく働き者だった母も大好きだったが、いっしょにいる時間の多い祖母は、私にとって最高の親友だった。ひょんなことから2歳半にして映画デビュー、あれよあれよというまに、まわりには私を知らない人は一人もいないという“人気者”になってしまった私。父は独自の教育を私に……。そして、ごくあたりまえの日本の家庭教育を“お家のおてつだい”<sup>おさな</sup>として、幼い時からあれこれきびしく教えてくれたのが、母と祖母だった。

東京生まれ、東京育ち、祖母とも1日も離れたことのない私が、戦争になり空襲を避けるために、父母と私は奈良県、祖母は何十年ぶりに生まれた土地の富岡へと、離れて住むことになってしまった。淋しくて淋しくてベソをかく毎日だったが、戦争中も私の仕事は忙しく、それでも、小さな休日ができる、私は祖母の住む富岡へとんでいった。NHKや映画会社からのお迎えのハイヤーしか知らなかった私が、母と二人でふつうの自動車や電車を乗りついで富岡行き。特に、新城駅から富岡までのボンネットバス（若い娘さん車掌の生声つき）は、興味津々<sup>きょうみ しんしん</sup>だった。戦後、それは“田舎のバス”という、私の大ヒット曲となって、現在も、その時代を生きた人々の思い出の1曲となっているようだ。富岡小学校の講堂満員のお客様を前に、何やら“中村メイコショー”のようなことをして、いくぶんかのおばあちゃん孝行をしたようなことも、うっすらと思い出される。

何より、都会しか知らない私にとって、たまに訪れる富岡の、みどりの多い、ゆったりとした、静かなふんいきは、こちよい“心のふるさと”だった。

父は、どうやら心の奥では、自分の深い理解者であった母を愛していたらしく、かねがね私に「おばあちゃんが眠る富岡の寺に、小生とチエコ（私の母の名前）の墓を建ててくれ。あまりよく知らない、学者ぞろいの中村家のキュークツな墓に入るのはチエコには気の毒だから……。」と言っていた。

母もまた、「おばあちゃまの眠る洞雲寺さんに私も……。」との遺言<sup>ゆいごん</sup>を私に残して亡くなった。迷わず私は、洞雲寺さん<sup>そかい</sup>にお願いして、祖母が疎開して住んで



いた家を近くに見下ろす、見晴らしのいい小高い丘の一角に“中村正常の墓”を建てた。もちろん、母の名も、亡くなったときに刻み、その横にメイコ・・・と、まだ現在は赤い字で刻んである。

もちろん私は、神津善行という人の妻だから、本来は東京の神津家の墓に入るべきなのだが・・・なんと理解のある我が夫はこう言ってくれた・・・

「キミは一人っ子だから、中村家の墓は君で終わってしまうと淋しくなるじゃないか。一人娘のキミをこころよくボクに下さった父上にお返ししよう。感謝をこめて。父上はきっと喜んで下さるだろう。我が家の3人の子どもたちが、東京のボクの墓と富岡のキミの墓を行ったり来たりしてくれるよ。いいじゃないか、それで。キミが大好きだったおばあちゃんも喜んでくれるよ。またメイコがそばに来てくれたって……………」

というわけで、私のホントのふるさと……………

それは、“八名小学校”のすぐ近く……………洞雲寺さん内に自分も眠ることになっている……………そう、富岡なのです。

### 中村メイコさんについて (1934年5月13日生まれ 76歳)

東京都出身。本名は神津 五月。夫は作曲家の神津善行、長女は作家の神津カンナ、次女は女優の神津はづき、長男は画家の神津善之介と芸能一家で知られ、中村をふくめた神津家は「神津ファミリー」とよばれる。

芸名は、本名の五月に由来する。「五月」を英語の「May」に置きかえたもの)この世代の女性にしてはめずらしく、女言葉をあまり使わない。

2歳の時に『江戸っ子健ちゃん』に出演し、映画デビュー。その後、天才子役として映画やラジオに多数出演。複数の配役をこなす、7色の声として有名となった。

テレビ番組には戦前の実験放送のころより出演した。ラジオ、テレビ、映画などに多数出演しているが、1953年のNHKラジオの連続放送劇「お姉さんといっしょ」では、一人で4役を演じている。

1955年には歌手としても活動し、『田舎のバス』(三木鶏郎作詞・作曲)が大ヒットした。NHK紅白歌合戦で1959年の第10回から12回まで3年連続で紅組司会を務めた。

<参考 ウィキペディア>



母親のチエコさんが左手で描いた絵(右手骨折のため)に、メイコさんが言葉をそえました。  
平成六年、春の彼岸に墓参りに訪れ、この作品を思い出されたそうです。母親は、翌年亡くなられました。この作品は洞雲寺に飾られています。